

〈報告〉

## 中京大学と私

— 40 年余前の記憶をたどり、我が人生を後輩に伝える —

陳 文昭\*

### 1. 日本留学への道

確か 1970 年、45 歳の時のある日、私は、当時の台湾陸上競技連盟会長で国会議員の許梁春菊氏から晩餐会の招待状を受け取りました。その時は、12 年にわたる教職を離れ、台湾彰化县政府教科体育視学官に転任して 11 年がたっていました。なお、その 11 年間で強く印象に残った人物は、陳全寿先生です。陳先生は故郷の高校で 3 年間、台中体育専門学校で 4 年間、計 7 年間にわたり彰化県代表として台湾省運動会（今の全国大会）で素晴らしい成績を挙げました。多くの中京大学体育学部の卒業生はご存じでしょうが、陳全寿先生はロサンゼルスオリンピックに出場し、中京大学では教授を務め、その後、台湾に戻り行政院体育委员会主任委員（スポーツ大臣に相当）になられた方です。

さて、この席にて私は始めて故梅村清明先生とお会いしたのですが、席を隣としたのは私が少し日本語を話すことができるであろう、との許会長の配慮であったと思います。会長は私の経歴について紹介しました。私はその席にて、走り高跳びの全国記録保持者であったこと、第二回アジア運動会（フィリピン）の台湾



卒業写真より

代表選手であったこと、現在は彰化县政府教科の体育行政の責任者であること、更には日本のスポーツなどについて話をしました。梅村清明先生はポケットから手帳を取り出して私の記録や連絡先をお尋ねになりました。そして、晩餐会が終わる間際に、突然、私に「陳君、中京大学に来ないか」とおっしゃったのです。私はびっくりして、緊張しながら「ハイ、考えさせていただきます。」と答えるのが精いっぱいでした。先生とは握手をしてお別れしたのですが、情味あふれる温かい手のぬくもりを今でもはっきりと思いだします。温厚で上品なお姿が

\* 中京大学同窓会台湾支部元支部長、全国マスターズ陸上競技協会常務理事、台北市陸上競技協会最高顧問

印象的でした。

それから二週間後、梅村清明先生親筆のお手紙を受け取ったのです。誠意あふれる激励と招請の手紙でした。同封されていたのは、中京大学入学許可証でした。感謝感激でしたが、迷いも大きかったのです。夜も眠れないほどでした。教職 23 年、あと 2 年で公職満 25 年、法令で定年の申請資格が得られます。このままで彰化県の中学校校長に昇進するチャンスもありました。もし、訪日すればこの将来性のある職を諦めなければならぬ、迷いに迷ったのです。

私は戦前、小学校を卒業した後、兄の勧めで東京の中学校に入学しました。その兄が帰国した後に第二次世界大戦が始まり、中学の三年生の時に学徒兵として招集されました。戦後、台湾に帰国（昭和 22 年の頃）したものの、それから 20 数年間、台湾と日本とは国交が中断することとなりました。しかし、新聞やテレビで、この 20 数年間に日本は経済大国となったことを知りました。高速道路、新幹線、至る所に 50 階以上もあるビルの林立には驚くばかりでした。世界博覧会はテレビで見ましたが、驚いたのは上り下りのエスカレーターでした。また、50m 以上もの平面エスカレーターでした。今となれば、珍しいことではないのですが…。たくさんの観客が立ったままで前に進んでいる光景には絶叫したのです。驚くべきは戦後 20 年余りの日本の進歩で、それには心より感激したのです。一方、台湾は戒厳令下にあり「井の中の蛙、大海知らず」の諺とおりの鎖国状態で、世界の流れに後れを取っていたのです。

こうした日本を見て、北海道で歯科医院を開業している兄に相談を持ちかけました。兄は東京の日本大学歯科医学士でした。この兄からは、物価が台湾の 3、4 倍もあることから慎重に、との返事。同じ教職にある妻は反対でした。3 人の幼児を抱え生活を考えればもっともなことでしたが、父が賛成してくれたのが大変に嬉しかったのです。そのうえ、父は経済的援助をして下さいました。早速、北へ向かい当時の台北体育専門学校（今の体育大学）の林鴻担

校長を訪問して相談にのっていただきました。林校長はアジア大会での私たちの団長を務められました。林校長は、その後、台湾省政府教育庁で体育督学に任命され、後には台北体育専門学校校長に昇進しました。私が勤務する高校を視察の折には大変に可愛がってくれました。一緒に食事をする間柄となり、この相談では賛成していただきました。その折、体育心理学を専攻するように勧められ、卒業後には台北体育専門学校に招聘して下さるとのことで、大変に心強く感じ、ここで私は日本留学を決心することができました。

すぐに手続きに奔走しました。しかし、戒厳令下にある台湾では、留学は国家試験合格者以外には許されませんでした。そこで、彰化県で医者をしている親友に協力を求めたのでした。親友は、奥様が日本人で奥様の兄上が東京にある会社の社長でしたので、その会社の中国語秘書となり、訪日後に中京大学入学許可証をもって留学生に変更する策を考えてくれました。警備総司令部へ申請書を提出したのですが、不許可との返事でした。その理由を確かめたのですが、理由はない、との返事に絶望したのでした。そして、平凡な日々へ戻ったのです。

その二か月後のある日、勤務する高校の同窓会へ教員として招待されたのですが、そこで、卒業生の一人が警備総司令部に勤務していることを知りました。彼に申請不許可の話をして協力を求めたのでした。その後、彼からの返信では、当時、台湾と日本とは国交断絶で、反日感情が大変激しいので訪日申請はほとんど却下されているとのことでした。それからは、何度も台北に出向き、紹介してもらった大佐級の司令部幹部宅にまで訪問して協力をお願いしました。その甲斐があり、一週間後に申請許可の通知をもらった時には顔が涙でクシャクシャとなったほどでした。十一か月余りの奔走が実り、8 月下旬に職を辞したのでした。日本での二年間の生活費をドルに換え、1971 年の 8 月下旬、家内と幼い娘二人に見送られ松山空港から伊丹空港へ旅立ったのでした。家族との二年間の別れです。飛行機はアジア大会以来の二度

目でしたが、今回は一人旅、心細く不安な機内でした。機内では最後の一服と決意し、20数年余の喫煙生活に別れを告げタバコを止めると誓ったのでした。

## 2. 日本に到着

大阪伊丹空港に到着、友人であり近畿大学の留学生の陳君が迎えに出てくれました。彼の三畳半の部屋に二泊、居候をしたのですが、始めて見た大阪は壮大なビルが林立し町をめぐる高速道路など何もかも珍しく驚くばかりでした。新幹線で名古屋へ向かいましたが、現代的な車内の設備やそのスピードには驚嘆しました。さらに、窓外を眺めて、つくづく関西方面の偉大な様子を珍しく思いました。名古屋駅に着きバスターミナルの二階でバスに乗り「殿貝津」(校閲者注、当時、豊田キャンパスまでの交通機関は名古屋駅または藤が丘からのバスのみで、大学最寄りのバス停が「殿貝津」)に到着し重い荷物を持って中京大学までトボトボと歩いたのでした。ところが、大学の事務受付で、新学期は4月からだから来年の4月に来るように、と親切にも説明を頂いたのです。私はびっくり仰天、私の不注意でした。訪日ばかりを考え、日本と台湾との教育制度の違いに全く気が付きませんでした。台湾は9月から新学期なのです。後日、この半年が私の人生に大きく影響するとは気づく余地もありませんでした。

大学は夏休みで誰もいません。幸いなことに、台湾の優秀陸上選手の蘇文和君に巡り合ったのです。寮の彼の部屋に一泊お世話になりました。翌日、名古屋駅まで戻り、近くのホテルに一泊したのですが、ホテル代は高く私の一週間の生活費にあたります。来年までの八か月を如何に過ごすかで頭は一杯となりました。兄の手紙にあった通り(物価は台湾の3~4倍)で、何から何まで高い!特に食べ物が高いのが印象に残っています。そこで、ひとまず大阪の友人と相談をしたのです。大阪の陳君は華僑が経営しているパチンコ屋とマージャン屋でアルバイトしているとのことで、私もその店に就職

することとしました。その店にいれば、職住に困らず、さらには若干の給料も頂けるので一挙両得でした。陳君の紹介で早速、面接を受けることとしました。私は日本語ができるし、マージャンのルールに詳しいので無事採用されました。給料は時給でしたが、一応、これからの八か月はここ京橋に滞在することとしました。しかし、この仕事は予想外に辛いものでした。勤務中は座ることができずに立ち続けてした。6時間立ち続けるのは辛いことでした。しかし、嬉しいこともありました。マージャンメンバーが足りずにピンチヒッターで卓に座ることが一番楽しいのでした。社長もマージャンが大好きなようで、時々、客としてマージャンを打っていました。そこで私も勤務時間外には客として一戦することもありました。

会社の休暇の時には至る所へ行きました。東京へも行きました。20数年前の東京は悲惨な焼け跡ばかりでしたが、いま見る東京は完全に復興し、現代化した日本、経済大国の日本、そのものでした。母校の中学校を参観しました。しかし、強く記憶にあるのは物価の高さでした。

## 3. 中京大学での授業

翌年の4月、重い荷物を背負って「殿貝津」へ戻り、入学手続きを済ませました。故謝長齡君とは4畳半一部屋での生活でしたが、私は自炊でした。最初の授業は体育社会学でした。台湾の大学にはない科目であり必修科目でした。20分前に教室に入ったのですが、寝ている学生やワイワイ騒いでいる学生は私を見て一瞬静かになりました。恐らく私を教授と間違えたのでしょう。そのあとに、梅村清弘先生が教室に入ってこられたので、学生は奇妙な目で私を眺めたのでした。その梅村先生は時々私に微笑みながら目を向けてくださったのが嬉しかった。

私としては最も大事な科目が心理学でした。体育心理学実験を担当なさっていたのが本間先生でした。時には先生の研究室を訪問したり図書館で資料を集めたりして体育心理学の勉強に

勤しんだのです。この本間先生は大変にお酒好きであったと記憶しています。その後、台湾にて食事を同席したことがあります、奥様の話によれば食事の大半はお酒とのこと、酒好き、というよりアルコール中毒と言ってよいのでしょうか。後日、先生は50才足らずでお亡くなりになったと聞いたのですが、その英明なお姿を思い出し悲しみにふけったのでした。

私が得意とし好きな科目は陸上競技でした。大学ではオリンピック金メダリストの田嶋直人先生の授業を受けることとしました。それまでに田嶋先生とはジャンプ競技について語り合ったことがありました。田嶋先生の授業では、私はいつも模範演技の指名を受けました。私にとっては簡単なこと、教員生活の20年余は合宿では選手のトレーニングでいつも指導をしていたからです。田嶋先生の授業では、学生に模範演技を見せるとともに日本語で詳しく解説しましたのです。今でいえば、無給の実習助手と言えましょうか。

授業では、短距離走のスタート、ハードル走ではスタートから第一ハードルまでの方法、各ハードル間の3歩目あるいは4歩目のハードリングでのフォーム、そしてゴールまでの走り方を私が解説し実演したのです。走り幅跳びは田嶋先生が解説をし、私は模範演技をしたのです。三段跳びでは、田嶋先生からホップ、ステップの動作を習ったのですが、私は大変に感動しました。というのは、私がアジア大会に参加した合宿でのことです。コーチが無能で、何も得ることがなかったのです。あの時に、良いコーチがいれば私はもっと良い成績が挙げられたに違いありません。当時、台湾からアメリカへ派遣された楊伝広や紀政は良い指導を受け世界の陸上界にて素晴らしい成績をあげています。優れた指導者の持つ意味は極めて大きいと思います。

他に好きな授業にはバスケットボールがありました。担当は小林平八先生でしたが、先生は、授業開始前には学生にコートを50周走らせました。先生は、昭和2年4月29日生れで45歳の私には走らなくともよい、と言って下



赤倉でのスキー実習（右が筆者）

さいましたが、私は若い学生と同じに扱って下さいとお願いしました。先生は分かって下さり、また、無理をするなども仰って下さいました。しかし、私にとって50周は大して苦にはなりませんでした。

#### 4. 日本での生活と父の死

しかし、貸間の自炊生活は私にとって重荷となりました。運よく、八事にあるお菓子屋の大橋屋さんに住み込みの店員として働くことができるようになりました。住と食に心配がないうえ、大橋ご夫妻は私のことを親身に面倒みて下さいました。卒業後、台湾に戻った私は大橋夫妻を何度も招待するようになったほどです。辛いことは全くなく、私は長くお世話になりました。この間、蘇文和夫妻、曾建昌夫妻、施徳洋君がいろいろな話をしに時々私を訪ねてきました。

1972年の大晦日のことでした。年末の店は大変に忙しく、連日、深夜まで働きました。特に大晦日は一番忙しく、朝早くから仕事に精を出していたのです。午後5時ころ、炊事場からの良い香りに大晦日のごちそうを思い、空腹を感じながら一人微笑んでいたのです。そんな至福の時、私は台湾からの電話をもらいました。青天の霹靂「父死す、すぐ帰れ」。その計報に私は大声を出して泣きました。あの温厚で一番私をかわいがってくれた父、訪日を賛成して下さった父、何度も迷惑をかけ、厳しかった

が私を大変に愛して下さった父。そんな父を思い出し、とどめなく涙が流れ理性を失ったのでした。大橋夫妻は私を慰め、早く出国手続きを取るよう指示してくださいました。

師走の名古屋、いたるところ大混雑の大晦日の名古屋、車はラッシュで前に進みません。大晦日の夜、出国管理局には当直が一人いただけでしたが、親切にも手続き担当者の自宅住所を教えてくださいました。手土産を持って駆け付けたのですが、あいにく不在とのこと。しかし、私の事情を聞いた奥さんはすぐに私を出先へ連れて行ったのです。事情を知った担当官はすぐに役所に戻り手続きを終えてくれました。大橋屋に帰った時はすでに11時を過ぎていましたが、夫妻は夕食を用意してくれていました。しかし、咽喉を通るものではありません。荷物を整理し、翌朝の一番列車で大阪の伊丹空港へ向かいました。元旦の空港は大混雑の上、航空券を取ることができませんでした。ほぼ一日を空港の一角で過ごすことになりました。昨夜から何も食べていませんでしたが、大橋夫妻が作って持たせてくれた心尽くしの弁当と飲み物は、眠れず疲れていた私にとって本当に有難いこと、この上ありませんでした。

翌日の臨時便で台北の松山空港に到着し、早速、台北駅から列車で嘉儀駅へ向かい、更に列車を乗り換えて故郷の民雄駅にたどり着いたのです。兄も3時間前に到着したのですが、父はすでに棺に納められており、兄も私も父の最後の顔を見ることはできませんでした。二人で父の棺を抱いて大声で泣きました。実に悲惨な別れでした。あんなに私を愛してくれた父と永遠に会えない虚脱感でした。姉たちと弟夫妻は食事を用意してくれましたが、悲しみに食欲を全く感ずることはありませんでした。

二か月後、名古屋に戻ったもの大橋屋はすでに店員を3名採用しており、私が働く場はすでにありません。新聞広告を探すなど、奔走して刈谷の牡丹飯店にて面接を受け採用されることになり、しばらくはここで生活することになりました。



刈谷の牡丹飯店前にて

しかし、給料が安いので二か月で辞め、今池のパチンコ屋に転職したのです。仕事は辛いものでしたが、福利厚生もきちんとし保険もあり、私はまじめに働いたためか店からは高い評価を受け、時にはボーナスを貰うこともありました。店は大繁盛で忙しい中、熱海への一泊二日の社員旅行がありました。熱海のホテルは素晴らしく訪日して初めての楽しい旅行でした。映画や演歌で有名な金色夜叉の撮影をした熱海の海岸を散歩し「貫一とお宮」のラブストーリーを思い出し、ニヤリとほほ笑んだのでした。夜の宴会のバカ騒ぎは大変に楽しく、興に乗って歌った体験は日本で体験したもっとも楽しい思い出の一つでした。私は卒業までこの店で働きたいと心から思ったのです。

しかし、思わぬ展開がありました。ある日、蘇文和君と曾建昌君が客として来店したのです。私とは絶対に口をきかぬこと、店員とは話をしないことを約束させました。店員である私は、テクニックで彼らが大儲けさせました。店は大儲けをする彼らに注意を払っていたのですが、蘇文和君が店員と話をしたことで彼が日本

人ではないことがバレました。私が疑われましたので、その二週間後、帰国を口実に給料を清算してもらいパチンコ屋を辞めることとしました。若気の至りとはいえ、危ない橋を渡ったのでした。

## 5. 日本での転機

私の不注意でした。訪日ばかりを考えて、日本と台湾の学校制度との違いに全く気付きませんでした。8月に辞職し、8月下旬に訪日したのですが、これが大失策でした。八カ月早く来たのが間違いでした。

日本での生活は最初の2年の予定（校閲者注、筆者は学士入学、と考えられる）が3年に変わりました。バイト代を含んだ生活費を一年で全部使ってしまったからでした。三畳半のアパートで自炊生活をしていたのですが、日本での生活費は高く、生活が立ちいかなくなったのです。そこで、肉体的には辛いですが給金の良いゴルフのボール拾い、引っ越しの荷物運び、高層ビルの窓ふきなどをしたのですが、最も辛いのは地下鉄工事でした。仕事が終わりにアパートに戻っても力が出ず自炊する気もなくアンパンと水で過ごしたのです。こんな重労働が続いたある日、大学での健康診断の結果を受け取りました。肺結核の疑いがあるので、再検査を受けるようにとの通知でした。もし、伝染性で悪性の結核であれば強制送還となるのを心配し一晩眠れなかったほどでした。あと半年で卒業ですが、ここで強制送還となれば二年余りの努力が無駄となってしまうのです。再検査の結果、良性の軽い結核とのことで安堵しました。医者によれば、栄養不足と過労が原因とのことでした。そこで、北海道で開業医をしている兄に援助を求めることとしました。兄から、バイトを止め栄養と休養に留意をするようにと、送られてきた封筒には10万円の為替が同封されていました。我々兄弟は独立した生活を営んでいましたが、この兄の心尽くしの愛が身に染みて嬉しく感じたのでした。

私はすべてのバイトを止め卒業論文の準備に

取り掛かり、春には無事に卒業することができました。私は当時の梅村清明理事長にお礼とお別れのあいさつに訪れました。清明先生は私に「陳君、卒業おめでとう。大変に苦勞をしたね。十分な面倒をみずに申し訳なかった。ついては、一緒に食事をしたいので何か食べたいものはないか」とのお話であった。私は「握りずしを腹いっぱい食べたい」と返答したところ、清明先生は高級な寿司屋で牛肉の刺身と握りずしをごちそうして下さったのでした。

そんなある日、私は浅川先生（校閲者注、東京教育大学を定年後、中京大学に赴任）に偶然にお会いし、研究室にてお話をしたのでした。浅川先生は、卒業後、半年ほど東京教育大学（現筑波大学）で勉強をしないかとおっしゃいました。もし、そうした希望があれば私を東京教育大学に紹介するとのことでしたので、私は喜んで同意し紹介状を頂いたのです。しかし、このことが私のその後の運命を大きく変えることになることは、知る由もありませんでした。

私の考えは、台湾の新学期は9月であり、この半年の間、心理学の資料を集めたり、そのほかの体育学関連の資料も集めたりしてみたかったし、東京近郊を回って見たかったのです。東京教育大学の教務長は紹介状をみて、早速、体育科補佐として採用してくれました。月給は一万円、仕事は教務科の雑務でした。大学の紹介で東京教育大学付近の三畳半のアパートで五か月間生活をする事となりました。その時の東京教育大学は最後の年で筑波大学への引っ越しの最中でした。そんな生活でしたが、午後は後藤先生の研究室で勉強をしたのでした。ある日、後藤先生は私を筑波大学へ連れて行ってくれました。ハキロにわたる広大な総合大学で、筑波大学は日本で一番美しい大学だ、と思いました。広大なキャンパス内をバスが走り、自家発電所をもつという、世界でもこれだけのレベルの大学は少ないであろう、実に素晴らしい大学でした。その後、東京教育大学は学生と一部の教官を残して筑波大学に併合されました。

## 6. 予期せぬ結末

万端の準備をして8月下旬に私は帰国しました。さっそく、台北の林鴻担校長のお宅を訪問したところ、林校長は私を見て「あっ！」と絶句しました。林校長は6月に定年、退職しており定年前に学校の人事を全部処理しており、私のことは全く忘れていたのでした。林校長は、定年前に招聘書を渡してくれていたらよかったのだが、大変に済まないことであったと謝ってくれました。そして、輔仁大学、文化大学、淡江大学を紹介して下さったのでした。実は、私は公立学校で23年間教職についていたので、残る2年は必ず公立の学校に就職しなければ年金受給年齢に達しません。紹介いただいた大学はすべて私立大学であるので就職には難があり、お断りしたのであった。しかし、幸いにも一年前に台北市のある市立高校の于校長（大学時代の後輩）から招請状を貰っていたのです。早速、面接に向かいました。于校長は大変に歓迎してくれましたので、その学校に赴任することとしました。8月30日のことでした。学校の近くに貸間を探し貝林の自宅へ戻り、荷物を整理して一人で台北に戻ったのでした。9月1日の新学期の始業式には間に合いました。

私は、運命には恵まれない男でした。三年間一回りして、元の高教員へ戻ったのです。それからは、平凡に教員を務めあげて65才をもって定年となりました。それというのも、台北市の教員は、ほかの県市や私立大学よりも給料が良いので転任する気にはならなかったからでした。于校長許可のもと、近郊の私立大学に数年間兼任講師として勤めることもできました。

定年となって今年で24年、この間、私は好きな陸上競技を続け、全国マスターズ協会を創設しました。中高年齢者の健康を維持増進することが私の務めと感じたのです。私も選手の一員として全国大会、アジア大会、世界大会と、各地の競技会に参加しています。長く、楽しい人生を送りたいと思い努力をしているのです。

マスターズ陸上競技は5才刻みでクラス分けがされ、「健康、触れ合い、楽しい人生」をモットーとし、90才以上の選手も多数参加しています。

## 7. 忘れ得ぬ二人の人物

1980年ごろ、72歳になる梅村清明理事長が中京大学のスポーツと学術の一同、約200名を引率して台湾を御訪問下さいました。この訪問は、戦後の台湾のスポーツ界に大センセーションを引き起こしました。その折、台湾のスポーツを指導をしていただいたことには、心から感謝申し上げます。記者会見の席で理事長は「私たちの訪問団が、台湾のスポーツの発展に少しでもお役にたてれば、私たちの任務が達成されたものと信じています」と仰ったのです。この一言は、各新聞にて高く評価され報道されました。私たち、台湾のOB一同は大変に光栄に感じ感謝したのでした。



梅村清明元理事長（左から二人目）と筆者（右端）

もう一人は安田先生（校閲者注、かつて棒高跳びの日本記録保持者で元中京大学体育学部教授）です。安田先生は毎年1～2回、台湾を訪問し台湾陸上界に多大な貢献をして下さいました。特に、棒高跳びについては、技術指導の講習会を開催され、実地に指導して下さいました。今でも台湾中部草屯商業高校体育館で棒高跳び国際親善競技会が毎年3月に開催されていますが、20年余にわたるこの大会の創設者は

安田先生です。参加国は日本、アメリカ、ロシアなど10か国以上にわたり、台湾陸上競技連盟も全国で最重要な競技会と位置づけています。今では、男子が5m、女子が4mを越える成績を挙げるようになったのは安田先生の御蔭です。

梅村理事長も安田先生も既にこの世にはいらっしません。しかし、このお二人のことは生涯忘れることはありません。

最後に、年を取るにつれて頭が大変に老化し

てきました。40年前のことを記憶のままに記してみたものの、たくさんの誤りがあるに違いないことをご承知願ひ、筆を置くこととします。(2015年8月)

### 謝辞

本稿の校閲、掲載にあたっては梅村学園学事顧問（前中京大学学長）北川薫先生に多大な御助力を得たことをここに記し感謝申し上げます。